

【調査報告】

多様性と参加拡大を掲げるイギリス大学入試改革と生涯教育学的示唆 —オックスフォード・ケンブリッジ両大学等でのインタビュー調査から—

渡邊 洋子

New Trends in British Higher Education
and their Implications for the Study of Lifelong Education ;
Interviews at Universities of Oxford and Cambridge.

WATANABE, Yoko

1 はじめに

本調査報告は、2012年11月11～14日に筆者がオックスフォード・ケンブリッジ両大学を調査訪問し、大学のアドミッション（募集・選抜）の現段階と直面する課題について、関係者に行ったインタビューの成果をまとめたものである。

オックスフォード大学では、イギリス高等教育全体に影響を与えている参加拡大政策（Widening Participation Policy）と同大学の教育的貧困地域の学校と連携した取組みなどについて、詳細な解説をいただいた。また同大のアドミッションの成功事例として挙げられた医学部の募集・入試とその基盤となる教育システムについて、医学部担当教授から具体的なご教示を受けた。またケンブリッジ大学では、カレッジ所属の学部アドミッション担当教授、および参加拡大政策を受けて教育的貧困地域で事業を展開する当局担当者と懇談し、大学改革上の困難さと克服への取り組み、同政策を大学としてどのように受け止め、いかなる方針で事業を展開しているかなどについて、インフォーマルな情報・意見交換を行った。さらに教育学部では、現職教師への大学院教育の実際、および地域学校との連携・協力の取組みについてお聞きしている。これらに引き続き、国としては大学入試が実質的には有しないとはいえ、社会福祉先進国とされながらも、イギリスから影響を受けたとして参加拡大事業に積極的に取り組むスウェーデンのストックホルム大学を訪問し、学生支援事業等の4人の関係スタッフから学生支援の実態と取組みの実情についてお話を伺った（同15～16日）。

本報告では、これらのインタビューから得られた知見の概要をまとめつつ、主に先端的取り組みを行っているオックスフォード・ケンブリッジ両大学を通して、イギリスの大学入試改革の方向性を読み取り、その生涯教育学的示唆を得たい。

2 訪問先とインタビュー対象者

（1）オックスフォード大学

①ペムブローク・カレッジ Pembroke College

ジェレミー・テイラー教授 Professor Jeremy Taylor

渡邊：多様性と参加拡大を掲げるイギリス大学入試改革と生涯教育学的示唆

医学部主任・チューター教員 Fellow and Tutor in Medicine

②大学当局 University Office

マイケル・レドレイ博士 Dr. Michael Redley ;
上級副財務官 Senior Assistant Registrar,
学生募集・選抜、アウトリーチ担当 Student Admission & Outreach Policy,
教育政策サポート部 Education Policy Support

(2) ケンブリッジ大学

①教育学部 Faculty of Education

ジェイン・ブルームフィールド氏 Ms. Jane Bloomfield
教育学部渉外秘書官・大学院教育資格コース上級管理者
Acting Secretary of the Faculty of Education and PGCE Senior Administrator

②アドミッション・オフィス Admission Office

ジョン・ベアド氏 Mr. Jon Beard
学部募集主任 Director of Undergraduate Recruitment

③セイモア・カレッジ Seymore College

マイク・スウェル教授 Professor Mike Sewell
歴史学・国際関係部門学術主任
Academic Director for History and International Relation,
カレッジ間連携アドミッションフォーラム座長
Chair of the intercollegiate Admissions Forum,
学部アドミッション委員会メンバー
Undergraduate Admissions Committee member

(3) スtockホルム大学

国際オフィス・学生サービス担当、アドミッション・オフィス
International Office/ Student Services, Admissions Office

リザベート・アイダーマーク氏 Ms. Elisabet Idermark
上級国際関係オフィサー Senior International Relation Officer
ジェニー・ブランドヒル氏 Ms. Jenny Brandhill,
アドミッション・オフィサー Admission Officer
モニカ・スヴァルフオース氏 Ms. Monica Svalfors
学生サービス担当 Student Services,
ファアゼー・カーラジ氏 Ms. Faezeh Khalaji
参加拡大事業プロジェクトマネージャー・コーディネーター
Project Manager and Coordinator of W.P.

3 オックスブリッジでのインタビュー調査の主な知見

（1）入学試験の方式

オックスフォードでは、GCSE の点数と専攻（科目）ごとに課される面接前試験の成績が申請の要件となる。ケンブリッジでは A* (AS) レベル（上位 5%）の点数が要件となる。

（政府の意向を背景に、ケンブリッジの方が A* レベルを重視する傾向が強い。オックスフォードは医学・理工系分野のみ、その傾向がある。）

応募者は、上記の点数に加え、個人声明書を貼り付けた入学願書を 10 月 15 日（オックスブリッジと一部の学部のみ。一般の大学では 1 月 15 日）までに、オンラインで UCAS（高等教育入学申請機関）に提出する。個人声明書（personal statement）には、4000 文字（characters）か 47 行とされ、詳しい志望動機、技能や業績、趣味や関心事、仕事経験、将来計画などを盛り込む。応募者は願書に希望する専攻とカレッジを記入する。大学はそれを受け厳正に書類選考し、面接候補者を決定（shortlist）する。12 月に専攻別・カレッジごとに、面接試験を行い、その結果から合否が決定される。

（2）入学試験の特色と重点

オックスフォードでは GCSE の成績に加え、専攻別の筆記試験（pre-interview test）を課す。これは基本的に全国試験、ないし専攻別の教員が作成した理解力テスト（aptitude test）である。

面接試験は、自らの専攻領域について身につけた知識を活用・応用して問題解決できる力がどの程度あるかをみるものであり、入学後の学部教育の中で、最大限に力量を伸ばし教育効果を上げられる素地があるかどうか、様々な問いかけや質問、議論を通して試問される。オックスフォードでは、例えば医学部は 10 倍程度の希望者から 3 倍程度の人数にまで書類選考で絞り、二つのカレッジで 24 時間以内に別の 2 人の教員が 2 回ずつ、計 4 回の面接を行っている。文系学部の面接は 1 回の場合が多い。ケンブリッジでは面接対象者を絞り込まず、志願者の約 85% を 1 回ずつ面接する。

（3）入試の前提となる学部教育の特色

オックスフォードは 38、ケンブリッジは 30 のカレッジを有し、大学当局とこれらのカレッジが異なる役割を担いつつも連携しながら、大学教育を行っている。オックスフォードでは、募集・手続き・期限・選考基準は、全カレッジの合意を得た共通のフレームワークのもとに、学内で統一されている。

大学とカレッジの関係性は両大学で少し異なるが、学部・学科という専攻をヨコ糸、カレッジをタテに例えるとわかりやすい。大学は、管理運営や入学、教育の基本方針について、カレッジの総意をもって決定できるような仕組みを提供し、カレッジは実質的な教育を担っている。学部教育においては、各学部・学科はカレッジを横断する形で講義を提供し、専攻学生が一同に会して学ぶ。各カレッジでは、所属教員が少人数指導を提供している。

講義と少人数指導の関係は、医学・理工系では講義がより大きな役割を担い、少人数指導はこれを補完するために行われている。他方、人文科目や芸術系科目では、講義より少

人数指導の方が、より大きな重要性を有する（オックスフォード Jeremy Taylor 談）。

オックスブリッジの特色ともいえる少人数指導は、オックスフォードではテュートリアルと呼ばれて、指導教員が 2～4 人の学生を対象に行われる。ケンブリッジではスーパーヴィジョンと呼ばれる。スーパーヴァイザーは大学院生が務めることも多いとのことである。

（４）最近の入試の動向について

オックスフォード・ケンブリッジでは近年、特定の私立高校（public school）出身者が大多数を占めた時代とは大きく異なり、学生の 6 割を公立高校（state school）出身者、4 割を私立高校出身者が占めている。公立高校出身者の割合はさらに増えつつある（オックスフォード Michael Redley 談）。

特に医学部などでは、同じ専攻に同じ学校から 1 名以上合格させないなどの制限を設けている。このような動向の背景には、2009 年の Alan Milburn らによる社会的流動性の調査報告書（Unleashing Aspiration: The Final Report of the Panel on Fair Access to the Professions）に基づく高等教育政策がある。すなわち、今後のイギリス社会は、高度専門職が動かしていく社会になることが予測される中、ほんの一握りにすぎない私立学校（パブリックスクール）卒業者が現在の高度専門職の 9 割を占めているという事態への憂慮から、社会的流動性の向上を促進するような高等教育改革が求められ、推進されてきた。具体的には、Office for Fair Access(OFA)が民間団体として、高等教育機関への提案や助言を行っている（Michael Redley 談）。

オックスフォード・ケンブリッジの双方とも、学生募集において Widening Participation という募集対象・教育機会拡大方針を採っており、そのために専門部署を設け、専任のスタッフを配置している。具体的には、教育的に恵まれない地域（両大学への入学者が皆無の地域や FSM 対象者の多い地域）へのアウトリーチ活動、同地域にある学校から優秀な生徒をカレッジに招き、授業体験をさせるなどのオープンデイの開催、カレッジごとに担当地域を決め、地域の教師の大きな会合に行きつて募集方針を説明する教員派遣や個別の問合せへの対応などを行っている（オックスフォード Michael Redley, Jeremy Taylor 談）。

これらの取り組みは飽くまでも、学力の低い学生を採って「レベルを落とす」というのでなく、より広い階層から優秀な学生を選び出して、障害を取り除き、確実に入学させるようにするということである。すなわち、募集（recruitment）の対象を広げることにより、より有効な選抜(selection)を行えるようにするものである（ケンブリッジ Jon Beard, Mike Sewell 談）。なお、両大学とも、障がいのある学生支援にはかなり本格的に取り組んでいる。ケンブリッジには障がい学生リソースセンターがある。なお、両大学の学費自体は上昇しているが、学費が優秀な学生の入学の障碍にならないように、各種の奨学金や学費の減免の様々な可能性を保障している）。

（５）学年歴について

両大学では、1 学年を 8 週間からなる 3 つの学期に分けている。例えば、ケンブリッジ大学は学則上、10 月 1 日～12 月 19 日を Michaelmas Term、1 月 5 日～3 月 25 日を Lent

Term、4 月 10 日～6 月 18 日を Easter Term と呼んでいる。

クレジットシステムにおける授業時間の換算の方法は、EU で出された生涯学習の成果を単位化するための文書において出されたものと思われる。（ケンブリッジ Jane Bloomfield の見解）

【インタビュー記録 1】

対象者：Dr. Michael Redley

日時：2012 年 11 月 12 日午後 3 時 20 分～4 時 35 分

場所：オックスフォード大学 Admission House, Lounge

Q 入試について

- ・ 本学の入試のプロセスは、各専門教科で課されるペーパーテスト方式の公的テストを受けてカレッジに応募する。面接リスト（shortlist）に登録されるとカレッジでの面接が認められる。
- ・ 30 カレッジはどれも歴史があり、異なるテストや面接スタイルを取り入れている。
- ・ 面接前テストは分野により、全国的な公的テストか、学部教員が作成するものである。
- ・ 入試に関わるすべてのことについては、ウェブサイト公開されている。

Q アドミッションにおける大学とカレッジの役割の違いは？

- ・ 入試は 30 カレッジが専攻科目ごとに独自の方針で行い、大学はその全体を掌握し、質保障をしていくという仕事を担っている。
- ・ 少ない定員数の学籍を競って面接をすることが、本学の独自性。
- ・ 大学のアドミッションのための「共通枠組」（Common Framework）が全カレッジによって 5～7 年前に合意された。専攻教科別の枠組と最低水準などが定められ、国内・国際的に期待される入学要件についての Standard Offer の情報が公開されている。
- ・ 各カレッジや各専攻科目の面接前テストとして、基本的に理解力（アプティテュード）テストを課している。
- ・ すべての情報を公開することが、一部ではなく、だれでもが平等にアクセスできるという条件の確保を意味している。

Q 全学の入試システムの中で、医学部入試の位置づけと最近の顕著な動向は？

- ・ 医学部は、職業人養成という性格から入試のやり方についてはかなりしっかりとしたやり方をとっており、オックスフォードの入試の特色が明確に表れている。オックスフォード大学は、医学部の入試が培ってきた面接のやり方とその意義を、大学全体にうまく取り込もうとしている。医学部では長年、3 年間で医師の基礎を培わなければならないために、学生を的確かどうか、人物を丁寧に見ることを重視している。同じカレッジで 2 回ともまったく別の試験官によって（二つのカレッジで 4 回）面接するという方式をとっている点が、公正であり、プレッシャーを与えすぎない点が評価されている。自然科学の分野でも、医学部にならって 2 回の面接を行っている。
- ・ 3～4 年前に変化があった。グレード A の右上にスター*をつけ、上位 5%の成績優

秀者に A* を与えることにした。現在、科学と数学と、経済学などの領域では、この水準を求めている。ケンブリッジ大学では、ほとんどの専攻科目でこの A* を取ることを要件として課すが、オックスフォードでは、社会科学領域などでは、ほとんど A* を課さない。いずれにせよ、ほとんどの学生は A* をもって入ってくるのだが。政府は A* を入学の際に考慮するように期待するが、オックスフォードではそれがすべてとは思わないし、そもそも政府が強制すべきものではない。

- ・大学は、最も有能な学生を取るのを何が邪魔しているのか、という観点から、アクセスの拡大に取り組んでいる。これに関しては、二つの動向が関わっている。

第一に、社会的流動性を向上させようとする政府のキャンペーンがある。以前は労働党政権下で活躍し、現在自由民主党政権下で働いている Alan Milburn は、2009 年に社会的流動性についての調査報告書を提出し、大学教育が社会的流動性の向上に大きな役割を果たすことを強調した。また 1 週間前に大学教育に関する新たな報告書を出した。

確かに以前、オックスフォード・ケンブリッジは、私立学校の出身者が主流を占めていたが、最近では、6 割が国立学校の出身者、4 割が私立学校出身者であり、国立学校の出身者の割合は増加している。アクセスの拡大はこのような政府の方針を反映している。

第二に、同時にそれは、大学の取り組みでもある。アクセス拡大のため、多くのスタッフが働いている。民間出資者が開催する教師の大きな集会に行き、アクセス拡大によって生まれる恩恵について教師たちの前で話し、優秀な生徒たちにオックスフォード大学を受けさせるよう説得して欲しいと言っている。

また「オープンデイ」を開催し、全国から来た生徒たちに各々のカレッジを訪問して見て歩く機会を提供する。最近では、全国の各々の県に対して 30 のカレッジが担当を決め、その県の学校は聞きたいことがあれば何でも、担当カレッジを通じて大学に問合せることとし、カレッジは担当地区にある学校の生徒たちがオックスフォードを訪問し、授業や学校生活を経験できるよう計画する。障害者、民族的少数者、社会的弱者、その他の人たちの入学に向けた様々な取り組みがある。

Office for Fair Access(OFA) <http://www.offa.org.uk/> という民間団体があって、アウトリーチやアクセス増大、参加拡大、教育普及度の低い地域の生徒への働きかけを、大学に対して奨励している。

注) The Office for Fair Access (OFFA) is an independent, non-departmental public body. Our role is to promote and safeguard fair access to higher education for lower income and other under-represented groups following the introduction of higher tuition fees in 2006-07.

Q 面接前のテストは、全国的なテスト以外はだれが作成しているか？

- ・面接前テストは、全国的なテストの他、例えば、数学、物理、歴史、文学などの理解力テストは、学部教員スタッフが作成している。
- ・またケンブリッジ・アセスメントという大きな会社が、様々な形で、面接前テストを援助している。テストの運営、採点、受験などを受け持っているほか、学校で受験する代わりに、テストセンターなどが肩代わりしている。

Q オックスフォードではどのような背景によって、いつから、入試への参加を拡大する方針を採り始めたのか？また、なぜそれが可能なのか？

- ・オックスフォード大学には、最もすぐれた人々を見出すのだという強い信念がある。アクセスを保障するとは、財政的な問題を解決することであり、障害物をなくすことである。
- ・歴史研究に携わっていた立場からの個人的見解であるが、第一の背景は、19 世紀の大学拡張運動で、労働者階級に大学教育を拓いていったという歴史的遺産があると考えている。私は Department Continuing Education の副主任をしており、関係者のだけれども、そんな経緯は知らないのだが。第二の背景は、第二次大戦後に、大学が一部の中産階級のものになってはならない、と労働党政権下で議論が起こった。第三は、10 年前くらいからであり、大学が民族的少数者など教育的

Q クレジットシステムは取り入れていないのか？

- ・本学は、他大学のようにクレジットシステムは採っていない。8 週間で 1 学期で 3 学期制であるが、8 週間以上にすると、研究時間が取れなくなってしまうので、そのような形での負担増は必要ないとみなされている。

Q 質保障はどのようにしているのか

- ・アドミッションに関わっては、第三者機関がある。

4 医学部学生の募集・選抜—オックスフォード大学ペムブローク・カレッジの場合

(1) 学部教育における大学とカレッジの関係

前述のように、大学は全体の運営方針と掌握、カレッジ間の調整などを担当し、実際の研究・教育は各カレッジの独自性に任せられている。学部では、専攻ごとに数名ずつ各カレッジに所属するので、カレッジには常に多様な領域の学生が学んでいる。

基本的な教育システムは、講義は全学の医学部生が一同に会して受け、カレッジでは、チューターから少人数指導（テュートリアル）を受ける、というものである。入学試験は基本的に、学術的成績が優秀であるばかりでなく、このような教育システムによって最も能力を伸ばし発揮できる学生を慎重に選び出す、という趣旨で行われる。

(2) ペムブローク・カレッジ Pembroke College における医学部入試の実際

1624 年に創立され、前身は法学生の宿舎 Broadgate Hall であった。学部生は約 400 名、院生約 100 名、アメリカからの訪問学生 100 名程度いる。女子学生の入学が初めて許可された 1979 年までは、男子のみのカレッジであったが、現在は女性学生の占有率 50%である。ハセルティン卿や米国のリチャード・ルーガー上院議員のほか、英国外務省の議会秘書官複数、18・19 世紀の著名な科学者、すぐれた神学者、弁護士などを輩出しているとされる。<http://www.pmb.ox.ac.uk/About/index.php>

ペムブロークの医学専攻では、学部教育についてはブラセノーズ (Brasenose) ・カレッジと連携しており、学生たちは両カレッジのチューター集団からテュートリアル教育を受

けている。出願には、学生は卓越した学業成績の記録がなければならない。化学で A レベルないし同等の資格、それ以外に A レベル 2 つ（そのうち 1 つは一度に受験した生物、数学、物理で、A*AA グレードを達成していなくてはならない）。すべての応募者は、BMAT テストを受け、厳選された少数の応募者がインタビューのために大学に招かれる。面接対象者は、選考プロセスにおいて、二つのカレッジから査定評価される。

ここで注目すべきは、オックスフォードの学部コースの前半 5 学期は、臨床前教育の中核をなすもので医学学士号が取得でき、後半 4 学期は、医科学名誉学位を取得できるという点である。臨床前コースには、解剖学と胎生学、生化学、生理学、神経科学、薬学、病理学と遺伝学が含まれる。第 1 回の BM 試験は、2 つに分かれる。1 年目の終わりの夏と 2 年目のイースターの時期である。この時期の学習を通して、カレッジはコースのすべての側面をカバーする高度なテュートリアルを提供する。

また、最終名誉学部生 (Final Honors School student) は、最終年度を通し、神経科学、分子医療、心筋・脈管・呼吸生物学、感染と免疫、健康と病気の兆候の 5 つの選択肢から一つを選んで学ぶことになっている。これらの選択肢を選ぶことで、当該フィールドの詳細な研究機会が提供され、それに関わって、セミナーでの指導とテュートリアルが行われる。学生はまた大学医学部門の一つに修士論文を提出することになる。両カレッジのテューター・チームが、専攻領域の教育について、学生に幅広いサポートを提供している。

以上のように、医学部に応募した学生は、3 年間で卒前教育を完了する。多くが大学に残ることを希望するが、学術的によい成績をおさめないと、オックスフォードにあるジョン・ラドクリフ病院の医学校に行けない。他の学生は普通ロンドンの研修病院の一つで研修を受けることになる。

大学院入学においては、ペムブロークでは毎年 2 人の大学院進学者が速成 (the fast track) コースに進むのを認めている。1 年目は Mr Jonathan Rees, Dr Richard Harrington, Dr Andy Peniket, Dr Fredrik Karpe and Dr Jeremy Taylor で構成されるテューター・チームの指導を受ける。

* 同カレッジは、授業モジュールと臨床指導の両方を含むテュートリアルを提供している。2 年生から 4 年生までの間、大学院進学医学テューターが、これらの学生の臨床指導を丁寧に指導する。

【インタビュー記録 2】

対象者：Dr. Jeremy Taylor

日時：2012 年 11 月 12 日午後 2 時～3 時 5 分

場所：オックスフォード大学 Pembroke College Jeremy Taylor オフィス

Q 基礎医学の研究者養成か？臨床医師養成か？

- ・イギリスでは通常、基礎的な医科学に 2 年、臨床に関わる学習に 3 年という 5 年制だが、オックスフォードは各々に 3 年かける 6 年制を採っている。
- ・最初の 1 年半は臨床前科学(pre-clinical science)コースであり、2 年目の後半と 3 年目で Final Honours Degree in Medical Sciences(B.A.)の取得を目指して基礎科学をみっちりとしてと学んで、比較的簡単な課題に関する論文を書き、後の 3 年は臨床に取り組む。

前半は基礎的な自然科学科目（生化学・生理学・免疫学・組織学など）を学び、臨床科学者になれる素地をつくる（これまで 2 人の優秀な学生が科学研究者になるべく、ストレートに博士課程に進学している）。

- ・後半の 3 年間は、臨床医になって患者の治療に当たるための準備期間である。前半 3 年目の終わりには、臨床研修の病院に入るための競争的な試験がある。臨床では、3 年間の成績によって振り分けられるため、オックスフォードの病院に残るのは少数で、ロンドンや近郊など、他の地域の病院に行くことが多い。
- ・他の大学ともケンブリッジとも異なるのは、法学や音楽専攻の学生と一緒に学ぶことである。カレッジには医学部生は 4 人だけなので、様々な分野の学生と交流がある。
- ・6 年目の最終段階ではかなり専門的な上級レベルの医科学を学び、高度の科学的知識に基づくリサーチプロジェクトにも取り組む。4 人の教員が関わる、学術知と臨床知を結びつける特別なモジュールがある。その成果は専門誌に投稿したり、学会で発表したり、高いレベルを目指している。

以上を通して、研究的にも臨床的にも通用する力をつけているので、両者のギャップや偏りについては、特に問題は感じていない。臨床医になってからも、アカデミックな関心のある者は、研究者になるために戻ってきて研究を深め、アカデミックなポストに就くことができる。

君たちは 21 歳までに一人前になれるのだ、といつも学生に言っている。

Q 入試の方法、特に面接について

- ・オックスフォード大学は、1 学年あたり 150 人の医学生を採るが、28 のカレッジに分散するので、各カレッジで実際に受け入れる学生の定員は、4, 5 人程度と少ない。学生は、カレッジ内では他専攻の学生と学生生活を送っている。
- ・志願者は 1500 人程度なので、約 10 倍の倍率である。
- ・医学部志願者は、16 歳で受けた GSSE (全国規模の入学テスト) の優秀な成績に加え、UKC (スキル全般)、BMAT (民間の Cambridge Group が作成) も受ける。
- ・面接は 1 月に行い、150 人の定員に対して 450 人にまで絞ってから、24 時間以内に 2 つのカレッジで 2 回ずつ行っている。
- ・個人調書のステートメントをもとに、志願者が何に関心をもっているかを把握する。
- ・志願者の関心事、医療保健（ヘルスサービス）の動向、倫理上の問題、医療の抱える諸課題などについて、知識があるかどうかにかかわらず、「あなたはどうか考えるか」を尋ねる。自分が馴染みのない事柄についても、それについて問われたときにどのような反応を示すか、に注意を払う。
- ・各々の試験官は 25 人の受験者に対し、1 位から 25 位まで優先順位をつけて提出する。
- ・それをコンピュータに入力して合算し、上位の学生からコンピュータが各カレッジに配置していく。

Q テュートリアルという教育方法について

- ・テュートリアルそのものは、医学生数の多いケンブリッジ大学（スーパーバイジングと呼ぶ。スーパーバイザーは博士課程の院生が担当することが多い）とは違う。

- ・小さい規模だからこそ可能になる方法であり、150 人の医学生のうち、ドロップアウトする学生は 1 名いるかないかである。
- ・下級生と上級生ではやり方も様子も違う。
 - ―1・2 年生では各々、年間 3 科目のチュートリアルを受けることが求められている。
 - ―同僚のチューターと同時期に行うので、ティームティーチングのようになる。
 - ―1・2 年生では 2～4 人の少人数でチューターのオフィスに集まって行う。
 - ―学生が事前に書いてきたエッセイをその場で採点し、理解が不十分なところを指摘・修正し、質問を受けながら、より深い理解へのサポートをするとともに、論点を議論する。
 - ―2～4 人の親密な関わりの中で行われるので、おかしいことを言ったからと笑われる心配もなく、緊張せずに安心して話せ、良好な人間関係もできる。有効な教育方法であり、チューター自身もそれを楽しんでいる。
 - ―医学系のチュートリアルは、人文系とは違い、講義の補足として知識の定着をはかり、理解を確かにするために用いられている。
 - ―3 年生では、2 人程度で、上級レベルのチュートリアルが展開される。より長いエッセイを書くことを期待されるが、とても内容の濃い、すぐれたものが提出されることが多い。

Q 多様な学生のアクセスを可能にする意図と方法は？

- ・有能ですぐれた学生を選び出し、有効な方法でしっかりと教育して世に送り出すことが大学（カレッジ）の使命である。
- ・出身の偏りを正し、広い層の学生にアクセスを提供できるよう情報開示を徹底している。
- ・多様性が学生を育てるという考え方が、学内で共有されている。
- ・UNIQ サマースクール

2010 年から実施しているアウトリーチの取り組みで、約 1 週間実施される。カレッジに、教育的に恵まれない地域出身の優れた高校生がやってきて学部生と一対で一同行動し、授業や学生生活を経験する（シャドウイング）。
- ・シックスフォームカレッジや継続教育カレッジとの連携

教育的に恵まれていない地域の学校のカレッジに、オックスフォードの雰囲気と似たような部屋を設けるなど、文化的な違和感を乗り越える取り組みをしている。
- ・地域別教師の会合（Regional Teacher Conference）

国内を 5 つの地域（ロンドン・エジンバラ・バーミンガム・カーディフ・？）に分けて、各地域の教師を集めて、大学の方針や入試方法を説明する。
- ・夏に School Teachers Day もある。

（教師は熱心である。各学校 1 名しか医学部に送れないので、ゼロのままか 1 名にするかがかかっている。）

Q 卒業生はすべて医師になるのか？

- ・途中でやめてプロの芸術家になり、その後また復学して医師になった卒業生もいる。

- ・オリンピックに出て活躍した学生もいる。
- ・基本的には、医師になることだけがすべてではないと思い、色々な人生の可能性を認めている。

Q シャドーイングについて

- ・シャドーイングは、高校生などがカレッジにやってきて、学部生について、その生活を実体験するものだが、なかなか難しい課題もある。
- ・参加したことのある志願者となない志願者との間に、不公平さが生まれるためである。
- ・学生の仕事経験も、同様に重視するような体制をつくっている。

Oxford University Office Building



Dr. Michael Redley



Professor Jeremy Taylor



Pembroke College, University of Oxford



Mr. Jon Beard Professor Mike Sewell



Ms. Jane Bloomfield



Seymour College, University of Cambridge



5 スtockホルム大学でのインタビューの概要

イギリスとは異なり、スウェーデンでは、入学試験に該当するものが存在しない。高等学校の成績が全国的機関に送られて一定期間保管され、必要な時に、希望大学とのマッチングに使われる（高校の競争は熾烈とのこと）。高校を卒業すると若者は通常、1、2年程度のギャップイヤーを過ごし、その間に働いたり海外に行ったりしながら、自分が何を勉強・専攻したいのかを考える。進学しようと思った時にいくつかの希望大学を申請すると、全国的機関がマッチングを行い、その結果が大学と本人に通知される。大学は一切、選抜のプロセスには関わらない。

近年、新たなテストが実施されるようになり、高等学校の成績に加えて、その点数が申請の際に参考として併記されるようになった。高校の成績は更新できないが、このテストは何度も受けられるので、努力の成果を評価の対象とすることができる。

スウェーデンでは差別禁止法があり、大学教育にも大きく反映している。ストックホルム大学では、イギリスの影響もあり、**Widening Participation** の取り組みを熱心に行っている。教育水準の低い地域で教育プログラムを展開しており、同大学の学生が有償ボランティアで生徒たちの勉強をみるなど、学生の参画を得て、活発な活動を行っている。

学内では、視覚障がいのある学生のためのノートテイキングをはじめ、移民や留学生などへの言語的サポートなど、必要に応じて多様な支援が行われている。また社会人学生が多く、授業などに子連れで通う姿もみられる（但し、子育て支援は市民サービスなので、女性支援センターのような施設は学内にない）。

6 一連のインタビュー調査を終えて—若干の考察

オックスフォード・ケンブリッジ両大学、およびストックホルム大学での今回のインタビューのキーワードは、大学教育への接近可能性（**accessibility**）と大学における多様性（**diversity**）であり、それらを実現・実質化するのが、大学への参加拡大（**Widening Participation**）方針であった。オックスブリッジでは、イギリス政府の方針に追随というよりむしろ、積極的に同方針を導入しているように見うけられた。

オックスブリッジ関係者のインタビューを通して受け止めたメッセージは「我々の大学には、出身階層に関わりなく、社会のあらゆる階層から同様に、最も優秀な学生が入学してくるべきである。これらの優秀な学生たちに我々のすぐれた学部教育を施し、より優秀な人材として社会に送り出していくことこそが、世界的に最もすぐれた我々の大学の社会的使命であり、存在意義だ」というものであった。そこには、歴史と伝統と権威を誇りつつも決してそれに甘んじず、グローバル世界の知のトップランナーとしての自覚と革新性にあふれた大学のあり方が示されているように思われた。また国際的評価も高く、北欧でのゆるぎない名門大学として知られるストックホルム大学においても、学生選抜には関与しないとはいえ、多様な学生が同一の場面にごく自然に共生・共学し、ともにゆったりと知性を育んでいく場としての大学環境、そして一人一人へのきめ細やかな支援体制は、十分に整備されていた。

自覚と革新性をもって、これらの大学のアイデンティティを中軸で構成し、実質的な活動を通して実質化しているのが、今回のインタビューで出会ったような有能で個性的なスタッフの方々である点に注目しておきたい。この人々は、ユニークな経歴と意欲、そして

「この大学をより素晴らしい大学にする」「志」のようなものをもって外部からやってきた人々である。今回インフォーマルに聴取したが記録化していない内容を踏まえれば、かれらの変革の取り組みには、学内外の「守旧派」との衝突やメディアの批判、一般社会の反発などとの闘いが含まれており、そこでの問題点や課題も少なくない。だが、そこに前向きかつ果敢に挑戦するスタッフと学生の多様性こそが、大学と大学の知を活性化し、理論と実践を、そして理念と現実をつなぐ、本来の意味での社会的有用性をもつ存在として、歴史と伝統をもった大学を、新たな時代的文脈に再定置することを可能にするのではないだろうか。

ミルバーンが提起したような社会的流動性の促進が、社会的停滞を打破し時代を拓く大学の使命であるとしたら、私たちは生涯学習時代に求められることは何か。おそらくそれは、一面的な受験学力に留まることなく、自己教育力の萌芽を備えた多様な学生たちと出会う方策を多チャンネルで生み出しつつ、大学教育という土壌でそれをゆたかに開花させ、生涯を通して自ら／他者とともに「学ぶ力」と、その成果を社会に大きく還元できる「実践に活かせる力」を育てていくことではないかと思われる。受験産業が隆盛をきわめ、高度な受験技術が商品として広く普及する現状から出発して、具体的な道筋を描くのは容易なことではないが、大学教員として多くの示唆と刺激を得られた調査旅行であった。

謝 辞

本インタビュー調査にご協力いただいた方々に、心より感謝いたします。